

山人の はしり

やまづら



吉橋通夫

小泉澄夫え

1

岩はだを流れ落ちた水が、小さな滝つぼで白いしぶきをあげる。しぶきの下で、羽虫をねらう黒い影がうごく。

——よしっ、でかいぞ。

仙吉は、さおをふって毛鉤けがしを水面に落とし込んだ。

とたんに黒い影が、ニワトリの羽で作った毛鉤に食いつく。針を充分に飲みこむのを待ってから、竿を立てて引き寄せ、手網ですくいあげる。

尺（約三十センチ）近いイワナが、網の中でおどる。背中の白い斑点と、腹の柿色が夕陽を受けてきらめく。

「おっ、大物じゃな」

いきなり背後から声をかけられ、仙吉は息をのんでふりむいた。

杣道そまみちに見たことのない男らが立っている。腰に刀を差した旅姿の長身の武士と、そのお供らしき荷物を背負った者たちがふたり。

仙吉は、つりあげたイワナをゆっくりと魚籠の中へ放した。うろたえているのを気づかれないようにしながら……。

——加賀藩の奥山廻りか？

長身の武士が、かぶった笠のはしを手で引き上げる。

「この近くに仙小屋があるのか」